

近年の日本を取りまく国際的状況の変化に伴い、日本における西洋史学はそのありようを大きく問われています。日本にとっての近代化モデルとしての西洋像を提示するという役割はもはや過去のものとなり、西洋史学という学界は、日本社会への影響力を急速に失いつつあります。多くの論者が繰り返し指摘しているように、「本場」に引けを取らない精緻な実証研究が増加する一方で、日本という場において西洋の歴史を語ることの意味は説得的に示されていない（あるいは、そうした問いそのものが放棄されている）という批判が長く続いています。

また同時に、グローバル化に伴う国内外の関係の緊密化の結果、日本の西洋史研究者は、外国語を用いて海外へ向けて研究成果を発表することが容易となりました。そこでは、従来はあり得なかったような、新たな「読者」との出会いが生まれています。これまでの日本における西洋史学は、主として日本人を「読者」として、日本語による対話を行ってきましたが、このような「国境」をこえた歴史研究においては、グローバルな「読者」の存在を前提に、「どのような読者に向けて、どのような歴史を語っていくのか」という問いが改めて問題となっています。

こうした「読者」との関係をめぐる問題は、日本における西洋史学のみならず、「外国史」としての歴史研究に携わる人々にとって共通の、重要な関心事となっています。「歴史学の「国境」」と題した本特集では、日本を代表する西洋史研究者による提言に加えて、国内外の様々な研究機関に所属する様々な研究者の見解を一つの議論の場を集めることで、現実に行われている幅広い実践やトランスナショナルな歴史の模索を紹介し、今後あるべき歴史学のかたちについての新しい視点を提示したいと思います。

初回となる今号では、阿部謹也や二宮宏之といった歴史家と並んで、日本の西洋史学界における社会史・生活史の開拓者として知られる川北稔氏、オーストラリア戦争記念館という国民国家の象徴的存在である国立施設に「外国人」として所属し、日豪間の歴史交流を実践している田村恵子氏の論考を紹介します。社会史・生活史研究がまさにその成功のゆえに、現実社会への問題提起の力を失いつつある現在、日本の大学に身を置く西洋史研究者はどのように歴史を再構築すべきなのか。靖国問題に代表されるように戦争の記憶がグローバルな規模で再編されるなか、戦争記念館という「記憶の場」でどのような歴史が生まれているのか。両氏の問いかけは、多くの「読者」が共有しうるものでしょう。

本特集が生産的な議論の場となるためには、既存の学術雑誌のような一方的な情報伝達ではなく、執筆者と「読者」が一体となった双方向的な意見交換が不可欠です。今号での議論をふまえて、本特集の趣旨にご賛同いただける方は、ぜひ次号以降に論考をお寄せください。本特集が「歴史学の「国境」」をこえる一つの試みとなることを期待しています。

「歴史学の「国境」」編集委員会（文責：津田博司）

---